

レファレンス

コーナー

アフリカの紛争

河田重隆

飢餓、紛争、砂漠化、エイズ、人種差別など、私たちが接するアフリカのニュースは極めて衝撃的である。一九六〇年前後の独立期から今日に至るまで、アフリカでは内戦や地域紛争、独立闘争などさまざまな紛争が発生してきた。紛争の原因の根源には植民地時代に西欧列強が引いた不自然な国境線があり、歴史的、政治・経済的要因と相俟って紛争を誘発している。浦野起史編著『二〇世紀世界紛争事典』（三省堂二〇〇〇年）によると、二〇世紀のアフリカの紛争は一八三五件計上されており、そのうち九割近く（一五九五件）が一九五〇年代以降に生じている。以下、近年刊行されたアフリカの紛争に関する図書を紹介する。

栗本英世著『民族紛争を生きたる人びと——現代アフリカの国家とマインリテイ』（世界思想社 一九九六年）は、人類学者による民族紛争

の記録である。フィールドワークの対象となった南部スーダンのパリ人と、スーダンと国境を接するエチオピア西部のガンベラ地方に居住するアニユワ人は、ともに国家の周辺に位置するマインリテイである。彼らは国家あるいは解放戦線との関わりなかで民族紛争を経験していく。パリ人を父に持つ著者はいわば文学者としての寄り添う視点を織り込むことで、民族紛争を内側から描出することに成功している。

富田正史著『スーダン——もうひとつの「テロ支援国家」』（第三書館二〇〇二年）は一九八三年に始まった第二次内戦を軸に、イスラム化、テロ、国内避難民、アメリカの関与、石油開発、奴隷についてスーダンの現状をまとめている。著者は、反政府勢力への武器売却・提供は内戦を要求するのと同じであると、アメリカの責任を追及している。婦女子の奴隷化、少年の奴隷兵士化、主に南部地域に敷設された二五〇万〜二〇〇万個とも言われる地雷の存在なども深刻な問題である。

青木一能著『アングラ内戦と国際政治の力学』（芹書房 二〇〇一年）は、アングラの内戦を冷戦構造とその終焉、キューバの介入、南アフリカの干渉政策といった国際・地域情勢のなかで分析している。アングラは農産物資源に恵まれた国であるが、その豊かさは一九七五年の独立以来間断なく続く内戦のため費消され、国民生活はきわめて劣悪な状況

にある。著者は不正ダイヤモンド取引や地雷を含む武器売却に対する反対、内戦終結に向けての国際的圧力の強化など、日本の果たすべき役割を強調している。

アジア経済研究所では過去二回にわたってアフリカの紛争を扱う研究会が組織され、その成果を刊行している。武内進一編『現代アフリカの紛争——歴史と主体』（アジア経済研究所 二〇〇〇年）は、エスニシティーの政治化、アイデンティティの歴史性、国際社会との関連の三つの視点から紛争に関わる主体は何かを掘り下げることで、紛争の特質を明らかにしている。ケニア、ブルンジ、ルワンダ、リベリア、スーダンの五カ国を扱う。最後の章（原口武彦）では、アナン国連事務総長によるアフリカの紛争に関する報告書（一九九八年四月）が批判的に検討され、「国際社会（＝欧米諸国）」ではなくアフリカ諸国のよき代弁者として「アフリカの現実に即した新しい国家像が構想されるべきであった」と論じている。

武内進一編『国家・暴力・政治——アジア・アフリカの紛争をめぐって』（アジア経済研究所 二〇〇三年）は、地域研究者による二二の事例研究を収め、ネーション・ステイト（国民国家／民族国家）と紛争の関係、紛争当事者が内外に向けて提示する紛争・暴力の解釈とその操作、紛争で生起するジェノサイド（大量虐殺）や残虐な暴力の問題、

聖職者・知識人・NGOなどの国内アクターあるいは権威主義体制による紛争抑止について考察している。アフリカではケニア、南アフリカ、ルワンダ、シエラレオネの事例を取り上げる。序章において編者は紛争の先行研究を検討し、アフリカの紛争モデルをもとに他地域との比較を試みている。

研究会の中間報告として、武内進一編『現代アフリカの紛争を理解するために』（アジア経済研究所 一九九八年）と同編『アジア・アフリカの武力紛争』（同 二〇〇二年）がある。資料編に詳細な年表、人名組織などの解説を備え、有用である。紛争は破綻国家ソマリアの飢餓、ルワンダのジェノサイド、多数の難民の発生など重大な人道的危機を伴う悲惨な結果をもたらした。紛争の予防を目指す予防外交はアフリカの国内紛争に対して有効であろうか。

総合研究開発機構（NIRA）・横田洋三共編『アフリカの国内紛争と予防外交』（国際書院 二〇〇一年）は、地域研究に基づく二〇にのぼる事例を踏まえ、紛争終結後の平和構築まで視野に入れ、アフリカの現状に即した予防外交のあり方を考察し提言を行っている。国家以外の予防外交の主体としては、国連、アフリカ統一機構（OAU）、西アフリカ諸国経済共同体（ECOWAS）、NGOなどが検討されている。（かわだしげたか／アジア経済研究所図書館）